故郷第五場面　読んだ読んだ

三年一組　氏名

ある寒い日の午後、わたしは食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、振り向いてみた。思わずあっと声が出かかった。……わたしは身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。わたしは口がきけなかった。

主人公はある寒い日の午後、表に人の気配がし、振り向き、急いで迎えた。来た客はルントウだった。急いで立ち上がって迎えたことから、ルントウに会いたいという主人公の気持ちが分かる。しかし、ルントウは記憶にあるルントウとは似もつかなかった。背は倍ほどになり、昔のつやのいい丸顔は黄ばんだ色になり、しわが折りたたまれている。血色の良い丸々と下手は松の幹のような手になってしまった。そんなルントウに主人公は、たくさん言いたいことがあったが、見た目からして経済的に苦しいことを知り、何も言えなくなり、「ああルンちゃん――よく来たね。」の一言しか言わなかった。その後、ルントウは「だんな様……。」と他人行儀の返事をした。主人公は身震いしたことに気付かないほどのショックを受け、厚い壁が二人の間を隔ててしまったことを悲しんだ。

さん

主人公の家にルントウが訪ねてきたとき、主人公は立ち上がってルントウを迎えたが、ルントウは三十年経ち、姿が変わっていた。背丈は倍ほどになり、つやのいい丸顔が黄ばんだ色に変わり、丸々と下手は節くれ立った松の幹のような手になっていた。また、目は赤く腫れ、古ぼけていた。そんなルントウを見た主人公は、驚き、喜びを伝えられなかった。ルントウも三十年で主人公に対する態度が変わってしまった。そんな二人の間には、厚い壁が隔て、距離ができてしまった。

さん

ある寒い日の午後、ずっと会いたかったルントウの姿が見え、主人公は急いで立ち上がって迎えた。昔と今とは見た目が違っていたけれど、昔とても仲が良かったから、一目で分かった。背は倍ほどになり、つやのいい丸顔は、今では黄ばんだ色に変わり、しかも深いしわが畳まれていた。目も赤く腫れていて、血色の良い丸々と下手ではなく、太い節くれ立った、しかもひび割れた松の幹のような手である。頭には古ぼけた毛織りの帽子、身には薄手の綿入れ一枚で、全身がぶるぶる震えていて、服も買うお金がないほどルントウは経済的に苦しい生活を送っていた。主人公はルントウに会えた感激で胸がいっぱいになり、「ああルンちゃん――よく来たね……。」と言った。だけどその言葉には、再会の喜びが伝わってこないことが分かる。

「何かでせき止められた」という文の「何か」は、違うかもしれないけど、三十年前はルントウと主人公は仲の良い関係だったのに、「だんな様……」と言われて、ショックを受けたと思った。だから、その「何か」は、「隔絶」かなと思った。

さん